

萩原恭次郎

萩原恭次郎（一八九九～一九三八） 群馬県勢多郡南橋村字日輪寺（現前橋市日輪寺町）の自作農の家の二男。一〇歳のとき叔母金井ソウの養子となり前橋中学を卒業。在学中から『秀才文壇』等に投書し、後川路柳虹の『現代詩歌』同人、平戸廉吉と知る。萩原朔太郎と文芸座談会を始め、井上康文らの詩人会に加わる。一九二二年上京、岡本潤、壺井繁治、川崎長太郎と『赤と黒』を出したのは一九二三年一月、アナキスチックな前衛詩人として知られ、また前衛美術家の集団『マボオ』に加わって活動。彼の第一詩集『死刑宣告』は大正期の前衛芸術運動の総合的記念物の感を見た。『種時く人』、『文芸戦線』に寄稿したが、文学のアナ・ボル対立以後『文芸解放』によって活動、つづいて『黒旗は進む』に拠ったが一九二七年郷里に帰り、第二詩集の『断片』を出した。一九三二年ガリ版個人誌『クロボトキン』を中心にした芸術の研究』をはじめ迫力ある農村詩を書いたが、最晩年「亜細亜に巨人あり」を書いて転向を疑わせた。死後に『萩原恭次郎詩集』。

愛は終了され

母の胸には 無数の血さえにちむ爪の跡！

あるいは赤き打撲の傷の跡！

投石された傷の跡！ 齒に噛まれたる傷の跡！

ああそれら痛々しい赤き傷は

みな愛児達の生存のための傷である！

忘れられぬ乳房はもはや吸うべきものでない

転居の後の如く荒れすたれ

ああ 愛はすでに終了されたのだ！

さをを今 ふたたび母の胸を蹴る！

新しき世紀の恋人のため！

新しき世界に青年たるため！

ああ われ等は古き父の遺跡を

見事に破壊するを主義とする！

幽 霊

私の思想は髪毛や胃や腸である！

私は晩飯を食って乙女に小説をよんでやる！

女でも男でもない幽霊^{ゴースト}が

脳膜にぼんやりとうつつている！

ぶらさがった上着のように青ざめて笑っている！

せむしのように部屋の中を泳いでいる！

女の臓腑や胎児まですっかりうつっている！

赤い人形はいくつも部屋に

糸につるされてさがっている！

彼の女は部屋中にボカンとした目を開けている！

大きな眼は何を見ているのか知れない！

不思議な世界がうつっているらしい！

時計のように寂しい夜が歩いて来る音が聞える！

日比谷

強烈な四角

鎖と鐵火と術策

軍隊と貴金と勳章と名譽

高く高く高く高く高く高く高く聳える

首都中央地点——日比谷

屈折した空間

無限の陷筭と埋没

新しい智識使役人夫の墓地

高く高く高く高く高くより高くより高く

高い建築と建築の暗間

殺戮と虐使と喧争

高く高く高く高く高く高く高く

動く動く動く動く動く動く動く

日比谷

彼は行く——

彼は行く——

凡てを前方に

彼の手には彼自身の鏝

虚無な笑ひ

刺戟的な貨幣の踊り

彼は行く——

點

黙々と——墓場——永劫の埋没へ

最後の舞踏と美酒

頂點と焦點

高く高く高く高く高く高く高く聳える尖塔

彼は行く——一人！

彼は行く——一人！

日比谷

断片

無言が胸の中を喰っている
行為で語れないならばその胸が張り裂けても黙っている
腐った勝利には鼻がまがる

(序詩)

断片

明るい空も激越の目には暗い 鉄の固まりのように燃えている
我等の手に帰って来た友は それは死体であった
血肉の友よ ふかく眠れ！
わが意志よ ぎりぎり目醒め来たれ
一切の文句はすでに絶たれているのである。

村木源次郎に(4)

断片

空に心臓の肉片がある
もうすっかり黒く星のようにこびりついている
誰も一人 空高きギロチンヌに黙々と死を迎えて行った彼を忘れて
いる。
古き同志に(5)

断片

大空には鉄のブランコが戦^{たたか}ぎを止めて輝いている
秋は強い狭搾器に絞め上げられている
我等は歌を歌わず単独に散って
我等の行く道を見つめる
秋だ 銅牌 のような木の葉は散る

散れ

道なかばに倒れて行つた仲間の顔が
木の葉になつて散つて来る

胸は打つ

打て

誰がこの感情を我等以外に知ろう

自分は 又我等の往く道は

更に新たに行われなければならぬ

肉体よ わが認識よ わが仕事よ

引きしほれ！

(8)

断片

昨日の友も次第々々に別れて今日は敵となる

我々は益々少数者となり益々多数者の意志する所に近づこうとする

吠えているものにも 騒ぐ者にも 高い所にいる者にも

静かなる無言の訣別をする

我々は嘲笑も叱咤も讃辞も知らざる仲間と共に我々の世界を明日に
進ませる

今日 我々は必要しない言葉を聞く者も無ければ訊ねる者も無い。

(12)

断片

今日我々は絶滅の状態にある

我々は絶滅の状態の道を往く

我々は最後の道を歩^{あき}つて往く

戦いは壁烈に凶猛に明日につづき明後日につづき只自由の日につづ
いている

絶滅された火こそダイナモに這い寄る火だ。

(13)

断片

百の言葉をつらねて一つの事より逃げた者よ

一つの言葉だけを発して黙っている者よ

言葉を発せず肉体と意志を馳って

無言の土に抱かれ帰って眠りし者よ

真に鎖づけられた生活の中より立って生活し行きし者よ

無言にして血みどろの者

汝こそ 我等に輝く。

(16)

断片

一瞬間 僅かなる水口はお前達の栓によって止る

だがそれは方向が変わるだけである

水源地の性質は停止する事が出来ない

地中の毛細管にまで重圧をくらったとて

満ちて来る水は何人にも止どめる事は出来ない

内部から自然の一刻一刻の崩壊

俺達は水源地に立って逆に地中へ一刻一刻潜って行く。

(17)

断片

海のような量の中に小さい鼓動が刻まれているのだ

知らぬ間にあたたまりゆく海水があったのだ

その水が沸騰するように熱して来たのだ

何時の間にか手も指し込めなくなっているのだ。

(20)

断片

彼等は俺達を憂鬱であると云った

俺達が何時憂鬱であるか

彼等は明るい群に入りたがった

ジャズで心をしびれさしたのであった

俺達は火薬よりも明るく弾丸よりも明確でありたいのだ。

(24)

断片

最後まで打ちこぼたれない巨大なる実体があることを俺は知ってい

た

俺は今 それは外にあるものでなく我と我等の間にある事を確信す

る

脅かされようが引きずり廻されようが

打ち砕かれようが灰のように降りまかれようが

消えも無くなりもしないものがあることを確信する。

(25)

断片

俺達は強権者にとって反対者でありまた全くの無価値者である事を

よろこびとする

彼等の価値も秩序も認めないから我々は無価値者なのだ

彼等の行く手に場所をふさげるだけで一分の代償にも役立たないか

らだ

彼等の最後の切札がどんな掴みようをしよう

闇からでも地中からでも伸びる芽は伸びて行く

煉瓦でもコンクリートでも石でも鉄でも越えて伸び出る
我々はそこへ特権や利害で立ったのではないからだ
それは理窟のない原理なのだ。

(26)

断片

大道のようにかたまった背
鉄板のように凹まなくなった胸
銃剣のように鋭い意志
銃口をそろえているような眼
それはみちんも君達を許さない思想である
また自らを許さない思想である。

(32)

断片

血は無駄を嫌い 病的を嫌い 誇張を嫌い
あんなにも愉悅を知り あんなにも寂寥に落ち込み あんなにも無
言で あんなにも活動して休まず
あんなにも自己を忠実に守って進む

そこが壊される 走り進んで行く
そこへ固まり着く 防衛のコンクリートとなる
前衛隊も後衛隊も看護隊もない
凡てを自分達一切で引受けねばならぬ血よ
次ぎから次ぎへ 傍目^{わきめ}もふらず 自暴自棄にならず
勇気に充ちて土台となり合って死滅して行く血よ
お前は消え お前は微笑む血よ。

(34)

断片

彼は黙りこくって我等の間にいる

百万言をもつてしても充し得ない心が黙らせているのだ

彼が我等に与える世にも優しいまばたきは

何時も痴氣を黙らせてくれる

言葉には言葉をもつて

そんなヒマのかかる虫の好きは所詮あそんでいる間のヒマ潰しの掛

け合いに過ぎない

じゃ、彼は語らないか？

語る！

必要なだけ語る 爆烈弾よりも整然と対象を碎片にする事の出来る

真実で

明日ヘタンクのような力で引ずる意志と歩み込んでいる肉体もて語

る！

(39)

断片

その部屋には机が一つあった

イースト ロンドンの貧民窟の屋根裏である

昼はロンドンの街々を歩き廻ってレモン水売って生活している

マラテストのため机が一脚あるのだ

ロンドンの煙突と煤煙と汽笛が部屋の中をつまらせている

窓の側をあぶれの労働者がつぶれた鳥打を冠って通っている

マラテストは夕食のパンを焼かずに食べている

イタリーの革命新聞のため毎夜白熱的論文を書いているのである

フランスの監獄から逃亡して来た身をこれからイタリーへ変装して

潜入しようとしているのだ

マラテストはいつ見ても同じ元氣の顔をして

繰り返しの投獄

ギロチンに引き廻される宣告

××

そのどれが真先に自分をとらえるか

そのどれへもこれへも腹を据えて

明日 その渦中に身を没するマラテスタが屋根裏にペンを握っているのである。
(49)

断片

僕は君が生れた時隣の部屋で

夢中になって君の母の苦しみを聞きながら原稿を書いていた

だって僕はその時金が一文もなかったからさ

僕が原稿を書き終えたら君は生れた

僕は原稿をポストへ入れに出ながら

わななく心を押さえながら上野にいる友達に金を借りに行った

僕はアーク灯のぼんやりした公園の森の中を

声高々と歌を歌って歩いて行った

自然に僕は歌っていたのだ

僕は自分に気がついてからも歌った

僕は愉快でならなかった

友は金と一緒におむつとタオルを渡してくれた

みな玄関に出て僕を見つめていた

僕は皆の顔を見て笑った

僕はその金でどっさり思い切って果物を買って

君の母の所へ帰って来た

だが 君は生まれて

父の生まれた土地へも行かない

母の生まれた土地へも行かない

両方とも僕達をきらっているのさ

僕はどっちへも通知しない

然しそんな事が何んだ

君はこの所から出発すればいいんだ

何物も怖れるな

勇敢なるかつ誠実なる戦いの旗を

僕は死ぬまで君のために振るよ。

(59)

もうろくづきん

今年の暮しは正月が来るのに餅のかざりも出来ぬ暮し

五十年を山に暮したおやちが家出をする
出稼ぎとは話が好きる

「達者でろう」

「達者でろう」

寄って来たもうろくづきんにかこまれて

五十のおやちは野良着をぬぎ首からつるしたさ、この手袋をはずし
押入れから年に幾度も着ない胴着に身ごしらえする

たはたほした毛の馬はもうろくづきんのおやちに引かれて馬小舎か
ら庭に出る

畑に麦ふみに出かける足を休めて近所の女達はやはり厚ぼったい黒

い布をかぶって見送る

小さな子供等もやはり目だけ出してもうろくをかぶって立っている
切ない者等は障子の影や冷い炉ばたにちぢかまり

「行ってきた呉んろ」と云っている

「うん、うん……」

陽に焼けたひげ面だけ出して野良股引にまといつくキモノのしりを
はしおる

「達者でろう」

「達者でろう」

たくさんの女や男のもうろくが立っていた

「後はのう」

「後はのう」

たくさんのもうろくが言った

おやちはひげ面だけ動かし声を吞んで黙った

おやちともうろくの一団が畑向うの坂に別れおやちが坂に消えた時

『たのんまあす!』というど太い声がみな頭の頭をつき貫いた。

その声は

冬になるともうろくづきんに筒砲半纏

氷る暗い四時には肩にふとんを当てて生きかつぎ出しにゆくその肩

に何とひびいたか

雪風に吹かれつつ松葉かくそのひび割れた太い手に何とひびいたか

夜は荒縄絢うそのこわばったてのひらに何とひびいたか

もうろく達はつむぢ風のように

おやちの後を追って行った。

「もうろくづきん」

厚ぼったい木綿の紺や黒の頭布兼襟巻。冬
になると私の生れた地方の百姓はこれを唯
一つの防寒具とする。雪の日なども傘を持
たず、もうろくの上に雪をつもらせて馬を
ひいたり、車をひいたりして行く。

谷

その深い谷底には、見えないがぶすぶす清水が湧いているだけで樹木や草が一面鬱蒼としている。春には花をつけて鳥が卵をふかしていたり、秋になると樹々が紅葉して美しい景色だ。実に何十年かに一人か二人がこの谷に下りて行った。下りて行ったものは不思議に再び崖を這い上って帰るものはなかった。やぶの中に怪獣がいるだろうとも伝わった。

私は私として堪えられなさや、悲しさをこの深い計ったことのない谷にもって来ては棄てていた。そして何とも言えぬ匂を底から吹き上げて来る風から嗅ぐのであった。

然しどうしたとか、そこにはちっとも塵芥ごみというものが溜らなかった。私も最後はこの谷に下りてゆき帰らない人になりたいと思うのであった。